



寺報

2021年(令和3年)

No. 309

8月号

Zenkyo-ji monthly
Communications Paper
En [えん]

縁

お経について(その2)

お経の起源

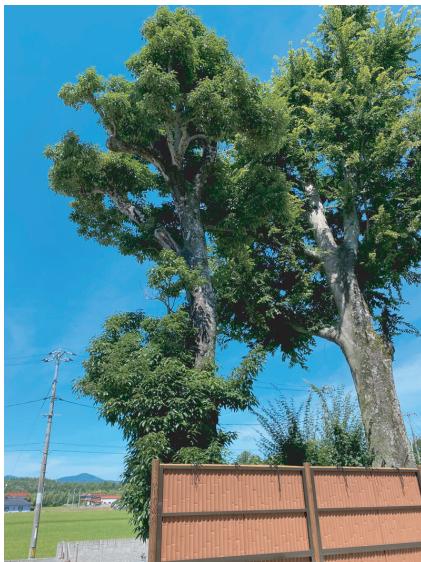
お経の基となる教えを説いたお釈迦様はどのような人物だったのか。お釈迦様のことを中心に、お経の起源について紹介します。

【お釈迦様(ゴータマ・シッダールタ)の人生】

お釈迦様の本名は「ゴータマ・シッダールタ」です。紀元前5~6世紀に、インドの王家で生まれました。お釈迦様は悶え苦しむ人間の生き方について考えるようになり、人々が苦しみから救われる道を探すべく、周囲の反対を押し切って29歳で出家します。

お釈迦様は出家して、山林で断食などの苦行に徹します。6年が経っても悟りを開くことができずに苦行をやめ、今度はブッダガヤーの菩提樹のもとで座禅を組みます。あらゆる欲望を避けて瞑想にふけるうちに、お釈迦様は宇宙の真理に目覚めます。この時、35歳になっていました。そして悟りを開いたお釈迦様は、あらゆる所へ足を運び、多くの人に自らの教えを説いて回ったと言われています。

45年もの間、自身の悟った教えの布教を続け、多くの弟子と信者を得ました。そして80歳のとき、弟子の阿難(アーナンダ)を伴い、故郷に帰る途中で病に倒れます。弟子から手にした水を一口飲み、沙羅双樹の白い花を咲かせて、その生涯を終えました。



きてはいかなかつたか。また、同じ淨土真宗門徒であつても、『こちらは○○寺の門徒』『あちらは○○寺の門徒』として、接し方に温度差を感じさせていなかつたか。

金子みすゞの代表作『私と小鳥と鈴と』の「節にある、「みんなちがつて、みんなない」を思い出しました。」

宗教において、この多様性は、どう捉えるか？ 多様性をどのように受け入れてきたのか？ ここ最近、よく考えています。

奈良時代に仏教が伝来し、お釈迦様の教えが、大きな山の頂上でみると捉えるなら、各仏教系各宗派の登山道は別々。「我が登山道のみが正しく、別の登山道から頂上へ登るのは危険だよ！」と言つて

いたことでしょう。

私が感じたキーワードは、多様性でありました。多様性（ダイバーシティ）は、今ではどの組織でも標榜され、多様性を受け入れ、多様性を認めましょう、と連呼れます。

このコロナ禍において、益々多様性は必要不可欠な要素となりました。

住職レター

コロナ禍の中、オリンピックが始まりました。夜更か

し禁物の私ですが、開会式は最後まで見入ってしまいました。未来ある青少年が多く出演し華を添え、コロナの最前線で活躍された方々を称え、派手さはなかったですが、落ち着いた演出に好感の持てる開会式だったと思思います。